

■佐々(介三郎)宗淳

さっさむねきよ
寛永飢饉始・1640＝

水戸藩主徳川光圀に仕え、「大日本史」のため諸国で史料収集、「水戸黄門」の“助さん”のモデル。

瀬戸内の一小島で、はじめ熊本に加藤氏、寛永に讃岐に移って生駒高俊に仕えるも生駒騒動が起きたため讃岐を立ち退く途上の佐々直尚の第五子に生まれる。そのため、幼名は島介といい、通称は介三郎。母は大木兼能の娘。戦国武将佐々成政の実姉の曾孫にあたる。自伝によると兄4人、姉1人、弟2人がいた。

その後、父が大和の宇陀松山藩の織田高長に仕えたため、家族と共に大和の宇陀で生活していたが、

慶安御触書・1649＝ **9歳**：

徳川家光没・1651＝11歳：

家庭の事情からか、おそらく父の命により、

新利根川完成1654＝14歳： **京の臨済宗妙心寺の僧となり、“祖淳”と号して、「本朝高僧伝」等を著した仏教史家の元元師蛭に師事。**

基礎学力が身についたと、のちに、師の元元師蛭に感謝している。

明暦の大火・1657＝17歳：

人身売買禁止1658＝**18歳**：この頃、備前国の清禅寺に滞在。

・・・・・・1660＝20歳： **学問躬行の不一致を反省、黄檗宗の隠元のもとで参禅修行。**

清帝国始・・・・1661＝21歳： **諸山教相を学ぶため、多武峰や高野山、比叡山に赴くなど、数年間、積極的に修業するが、**

殉死禁止・・・・1663＝23歳：この年、水戸藩主徳川光圀が初のお国入り。

酒井忠清大老1666＝26歳：

入鉄砲出女令1667＝**27歳**：

シャクシャインの乱 1669＝29歳：

この間、 **「何らかの事情で妙心寺に戻っていたが、仏教界への批判は厳しいものとなり、この頃、“父母兄弟が殺されても復讐してはならない”とする梵網經の一節を読んで仏教に疑問を持ち、密かに論語を読み儒学に傾倒するようになり、**

・・・・・・1671＝31歳：

母が死去。

東南海運確立1672＝32歳：

水戸藩主徳川光圀が「大日本史」編纂に本格的に取り組むべく{彰考館}を開設し、人材を求め始める。

三井越後屋・1673＝33歳：

これ以前、 **「ついに、妙心寺を出、還俗。「立志論」を著した後、江戸に出府、四兄の援助で暮らすうち、**

・・・・・・1674＝34歳：

***縁あって、「立志論」など呈上した結果、水戸藩主徳川光圀に召抱えられ、進物番兼史館編修となる。**

直後に、光圀の命で、常陸国の清音寺の住持に招くべく、かつての師蛭に懇請、一旦は断られる。

・・・・・・1676＝**36歳**：

長兄が死去し、宇陀の家は四兄が相続。

この間、 **“直清”と改名。光圀はその大胆さと見識を愛して側近として用い、**

藤十郎登場・1678＝38歳：

***史館勤務のまま小納戸役となり、京や奈良に関わる深い経歴や、古典・文書を探索し、鑑定する学力を有したことから、「大日本史」の編纂に携わる彰考館史臣の中心人物の一人となり、この年の京都・奈良方面派遣を皮切りに、史料収集に多く派遣され、「大日本史」は“出典注記”を明記する画期的歴史書となる。**

徳川綱吉將軍1680＝40歳：

“直清”から“宗清”に改名か。京都・奈良・吉野・高野山・熊野・河内方面派遣、宇陀に近いこともあり、おそらく帰郷して老父を見舞ったと思われる。 **「特に「高野山文書」、**

天下一禁止・1681＝41歳：

父が死去。小納戸役200石から加増されて300石となる。「参考太平記」編纂に寄与。京都・奈良・醍醐方面派遣、 **「東大寺文書」の調査は、古文書研究の上でも後世に大きく貢献することになる。**

好色一代男・1682＝42歳：

この頃、 **“宗清”から“宗淳”に改名か。**

八百屋お七・1683＝43歳：

光圀のために宇陀の生家から山椒魚を送ってもらっている。須賀川の相楽家結城文書の調査。再び、師蛭に懇請し、受諾されるも、

堀田正俊暗殺1684＝44歳：

出世景清初演1685＝**45歳**：

「本朝高僧伝」に専念したい師蛭は帰京したが、その後も、光圀とともに、親密な協力関係は続く。九州・中国・北陸方面に派遣され、丸山可澄と採訪。半年がかり千四千里の大掛かりな旅を成し遂げ、この間、天満宮の史料閲覧で世話になった貝原益軒とは以後親交。

生類憐令始・1687＝47歳：

那須国造碑の調査を命ぜられる。

日本永代蔵・1688＝48歳：

四兄が死去。吉弘左介と共に、 ***2代目の史館総裁に任ぜられる。**

・・・・・・1689＝49歳：

吉弘左介らと共に、「修史義例」を作成。この間、「大日本史」中の「源義経伝」も執筆している。この年、最後のお国入りとなった光圀のお供で領内を廻った際、常陸太田で命じられて、光圀の隠居地を探して報告。

湯島聖堂・・・・1690＝50歳：

再び山椒魚依頼。その地に建設した **西山荘に藩主を退いて隠棲した光圀から重大な使命を託され、**

別子銅山始・1691＝51歳：

「那須国造碑修復工事の総指揮をし、太田久昌寺で一切経の箱書きを行なう。

世間胸算用・1692＝52歳：

「さらに、那須の車塚(上侍塚古墳・下侍塚古墳)の発掘調査を行い、世界的に見ても遺跡発掘の嚆矢となる。続いて、光圀が10年以上も懸案としてきた湊川楠公碑建立の現場監督に派遣され、併せて史料採訪。

奥の細道・・・・1693＝53歳：

前年に引き続き、秋頃まで京都・奈良に史料採訪。兄彦衛門の次男藤蔵宗立を養嗣子とする。

芭蕉+師宣没 1694＝**54歳**：

將軍綱吉の命で江戸に出府してきた光圀と2年ぶりに対面。

生類憐令頂点1695＝55歳：

西山荘に戻った光圀の後を追ひ、

重秀勘定奉行1696＝56歳：

安積寛兵衛・中村新八等との堂々たる議論を経て「重修紀伝義例」を作成。 ***願い出て史館総裁を辞任。その後は、格式小姓頭として西山荘の光圀に近侍し、近くの不老沢に居を構え、**

・・・・・・1697＝57歳：

貝原益軒が親友宮崎安貞の著した「農業全書」刊行に当たって、光圀に序文を依頼して来た際、光圀に代って推薦書簡を書いている。

吉保大老格・1698＝58歳：

おそらくマラリアで継室の淡河氏が死去、看病で感染したらしく、まもなく、 **「没した。**

思想的にも優れたものを持ち、「大日本史」を編纂するなかで、従来高く評価されてきた安倍仲麻呂について、叛臣とまで批判する「安倍仲満論」も著している。